

琵琶湖の最北部には葛籠尾崎と呼ばれる琵琶湖に突き出した岬状の尾根があります。

竹生島がすぐ目の前に見えます。その葛籠尾崎東側の沖合約10〜700m、葛籠尾崎の湖岸に沿って北へ数kmという

広い範囲の湖底に葛籠尾崎湖底遺跡があります。遺跡のある付近の湖底は葛籠尾崎の東岸に沿って水深約70mを測る

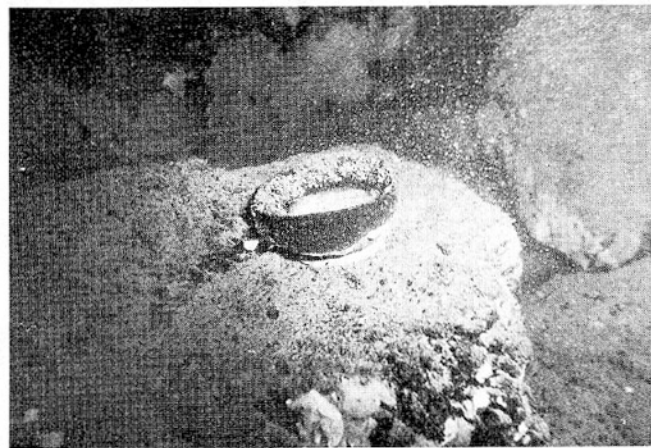
湖底谷が形成され、そこから多数の縄文土器などが引き上げられています。

琵琶湖湖底で遺物の発見状況が確認できる最古の事例は大正13（1924）年で、葛籠尾崎の東側、長浜市湖北町尾上（旧東浅井郡湖北町尾上）の漁師が底引き網によって土器を引き上げたことが契機となり、遺跡の存在が明らかとなりました。

は縄文時代早期から平安時代後期までの数千年間にわたります。なかでも縄文時代早期前半や中期終末の土器には完形品の良好な資料が多いことが特徴として挙げられます。

地元尾上の出身で、京都教育大学で教鞭を執っておられた小江慶雄氏（元京都教育大学学長）は、葛籠尾崎湖底出土の遺物の散逸を防ぐとともに、昭和25（1950）年には『琵琶湖先史土器序説』を刊行され、遺物を紹介するとともに出土状況を検討されました。のちに小江氏は、葛籠尾崎湖底の地形環境・湖水流などから湖底遺跡が形成される要因について海外の水中考古学の成果も取り入れて、本格的に調査研究を進められま

葛籠尾崎湖底遺跡



葛籠尾崎湖底遺跡の土器。湖成鉄が付着している

した。また、昭和34（1959）年に琵琶湖学術研究会によって実施された「琵琶湖総合調査」では、葛籠尾崎湖底遺跡の調査を担当し、日本で初めて考古学調査にスキューバ潜水を取り入れたことで、当時大きな注目を集めました。

や人為的な廃棄・祭祀の結果などがありますが、いずれも推定の域を出ていません。これまでに引き上げられた土器を観察すると、湖底に堆積した湖成鉄が土器の内外面に付着していることから、湖底の堆積層に完全に埋まってしま

た。ところで、葛籠尾崎湖底遺跡はどのような要因で形成されたのでしょうか。諸説あるうちの代表的なものに、①湖岸に存在した遺跡が陥没・崩壊など地形変動によって湖底に沈んだ、②遺物が河流によって湖底に運ばれた、③運搬時の事故

の要因が想定されています。世界的にも類をみない深水域の遺跡であること、また、湖底遺跡の調査・研究の端緒となった遺跡であること、幽玄なイメージで語られることの多い奥琵琶湖の湖底に所在するという遺跡の神秘性とも相俟って、湖底遺跡イコール葛籠尾崎湖底遺跡という認識が未だに根強いことも事実です。

深 水 に 潜 む 数 千 年 分 の 謎